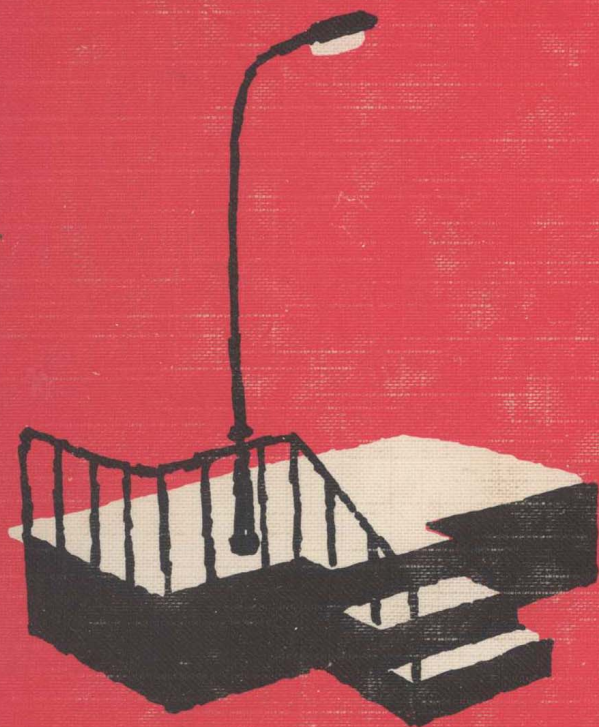


中學校劇 名作全集

上卷



日本演劇教育連盟編

中學校劇 名作全集

上 卷

日本演劇教育連盟編



日本演劇教育連盟

中学校劇名作全集 上巻

国土社 1968

254p 22cm

基本カード記載例

日本演劇教育連盟

1937年に創設され、はじめ日本学校劇連盟と称したが1859年に改称された。幼児から小、中、高校までの教師および児童演劇、サークル演劇の活動家、学生によって組織される自主的研究団体。月刊の機関誌『演劇と教育』を発行。

会長＝菊田要、事務局＝東京都豊島区池袋2の3の3
電話(984)4625 郵便番号 171

中学校劇名作全集／上巻

1968年10月15日 初版発行

1978年10月25日 11版発行

定価 1,200円 検印廃止

編者 日本演劇教育連盟

発行者 長宗泰造

印刷所 株式会社 厚德社

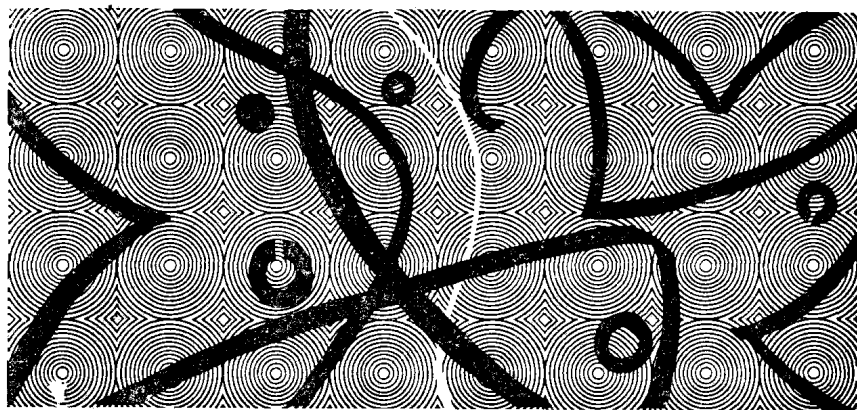
発行所 株式会社 国土社

東京都文京区目白台1-17-6

電話 (943)3721 (代)

振替 東京6-90631

郵便番号 112



まえがき

日本演劇教育連盟では、一九五四年に、『日本学校劇名作全集』全四巻を編集し、その中の一巻を、中学校用にあてました。それは、はっきりした学校劇運動の立場に立って、学校劇脚本の遺産を整理し、今日の学校劇のレパートリーを確立しようという明確な意図をもって編集されたものでした。

さいわいわたしたちの意図は生かされ、このシリーズの、中学校用、一巻におさめられた作品群は、その後の中学校演劇の標準的レパートリーとして、全国の中学校で広く上演されました。

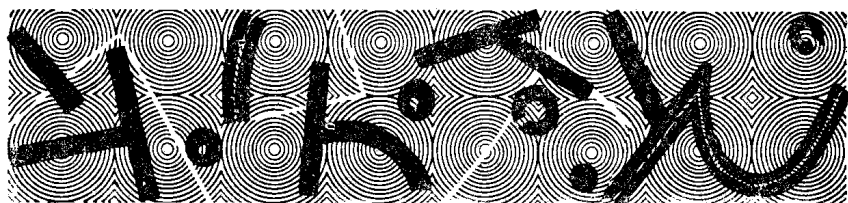
それから十五年の間に、中学校演劇にも、大きな発展があり、すぐれた作品も数多く発表されました。そこで、その成果をとり入れ、先の版を改めて決定版二冊とし、新しいよそおいで刊行することになりました。

この二巻が、これからの中学校演劇の道標として、広く活用されることを念ずるものです。



もくじ

三つの願い	△三幕▽	小山内 薫	5
・登場人物	男2人、女2人、その他	・上演時間	約35分
桃源にて	△三幕▽	武者小路実篤	16
・登場人物	男3人、女1人、その他	・上演時間	約50分
彦市ばなし	△二場▽	木下 順二	38
・登場人物	男3人	・上演時間	約50分
汚 点(しみ)	△三幕▽	斎田 喬	56
・登場人物	男10人、女2人	・上演時間	約50分
蘭学事始	△一幕▽	落合聰三郎	85
・登場人物	男8人	・上演時間	約45分
火星から帰った三人	△二場▽	富田 博之	100
・登場人物	男16人、女5人、その他	・上演時間	約50分
スサノウの笑い	△三幕▽	粉川 光一	124



・登場人物Ⅱ男5人、女2人、その他 ・上演時間Ⅱ約40分

どろぼう仙人 Ⅱ一幕Ⅴ 津島 昇 140

・登場人物Ⅱ男3人、女1人 ・上演時間Ⅱ約25分

花 火 Ⅱ一幕Ⅴ 林 黒土 151

・登場人物Ⅱ男1人、女2人、その他 ・上演時間Ⅱ約40分

あの世 この世 Ⅱ五場Ⅴ 北村 小松 167

・登場人物Ⅱ男11人 ・上演時間Ⅱ約30分

むじな沢のはなし Ⅱ一幕Ⅴ 高橋 昭 181

・登場人物Ⅱ男9人、女4人 ・上演時間Ⅱ約25分

どこかで春が Ⅱ一幕Ⅴ 片岡 司郎 192

・登場人物Ⅱ男11人、女11人 ・上演時間Ⅱ約45分

あこがれ Ⅱ一幕Ⅴ 辰嶋 幸夫 210

・登場人物Ⅱ男7人、女7人 ・上演時間Ⅱ約45分

■作品と作者について.....

編集／日本演劇教育連盟

・編集担当委員

石 原 直 也

副 島 功

辰 嶋 幸 夫

富 田 博 之

桃 井 恒 春

装置図／滝 口 二 郎

谷 川 隆 二

装 幀／市 川 禎 男

カット／五 百 住 乙

三つの願い

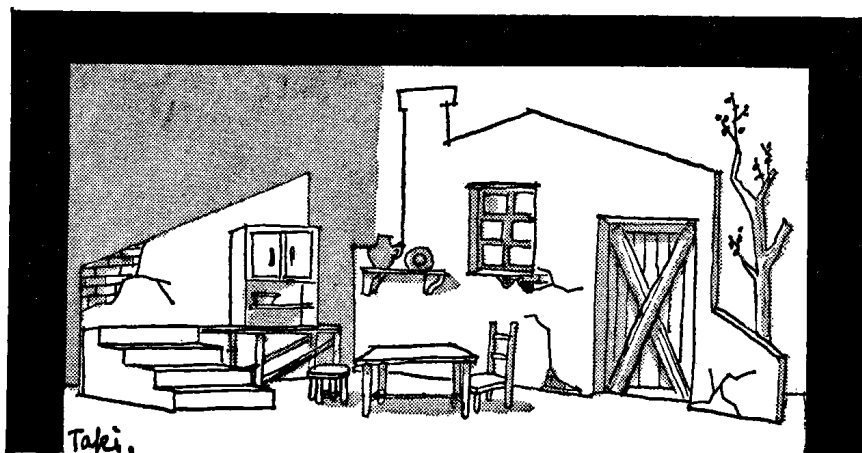
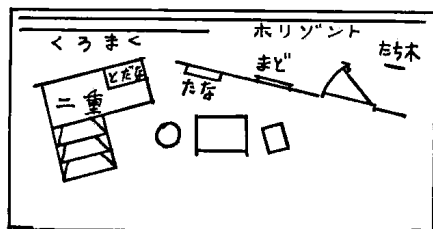
小山内 薫作

■登場人物＝男2人、女2人、その他

■上演時間＝約35分

■あらすじ

貧しいきこりのマルチンは、森の中で木の中にとじこめられていた仙女をたすけ、三つの願いのかなうゆびわをもらう。よろこんで帰ったマルチンは、ゆびわを女房のマルガレットにあずけ、どんな願いごとをしたらいいか学校の先生や弁護士に相談しようとしていく。そのあいだにマルガレットは腸詰がほしいといい、第1の願いがかなう。マルチンが怒り、腸詰がお前のはなの先にでもはえればいいといったひょうしに第2の願いがかなってしまう。のこされた第3の願いは、どうなったろうか……。



登場人物

マルチン（きこり）

マルガレット（きこりの妻）

カスパル（となりの人）

小仙女

兎

蝶

鳥

犬

第一幕 森の景

遠くに村が見える。大きなかしわの木のある切株の上に一匹の兎がすわっている。

兎

（切株の上で、ものをたべたり、きき耳をたてたり、耳をうごかしたりなど、いろいろする。やがて切株から飛びおりて、舞台を去る）

二匹の蝶

（舞台を横ぎって飛ぶ。やがて小高い山にと

まる。鳥が出てくると、飛び去る）

鳥

（木のまわりを飛ぶ。マルチンがでてきても、まだ飛んでいる。やがて飛び去る）

マルチン

（おのを手にして出てくる。ちょっと立ちどまって鳥を見る。それから、かしわの木へ近づく。見あげる。手につばをする。木を切ろうとして、おのをふりあげる。おのをおろす。くたびれたように首をふる。ふりむいて切株に腰をおろす。がっかりしたように首をうなだれる）

兎

（木のうしろからでてくる。しばらく木の前で遊ぶ。ふとマルチンに見つけられる）

マルチン

ぷすーすーぷすーすーぷすーすー。

兎

（木のうしろにかくれる）

マルチン

（そっと木のそばによって、兎をつかまえようとする）

兎

（マルチンが木のそばによってくるやいなや、木のうしろの穴の方へにげる）

マルチン

（それをみつめて、追っかける）

兎

（穴へかくれる）

マルチン (ひざをついて、兎をひっぱり出そうとする。だんだん手をおくの方へつつこむ。やがて急に、

わっと叫んで穴から手をぬく) ちくしょう——くいつきやがった。(かしわの木のところへもどつてきて、手につばをして、歌いながらもういちど木におのを入れる)

ちよん、ちよん、ちよん。

ちよん、ちよん、ちよん。

ちよん、ちよん、木を切る、幹を切る。

ちよん、ちよん、ちよん。

ちよん、ちよん、ちよん切る、ぶった切る。

声 (木の中から) マルチン。(マルチン耳をすます。それからまたおのをあげる) マルチン。

マルチン (見まわす) マルガレットか、そんなはずはない、女房の声じゃない。昼飯には早すぎる。おれは夢でもみたんだろう。(またおのをふりあげる)

声 マルチン。

マルチン (おのをおろして、見まわす) また呼ぶな。

だれだ、だれだ。

声 ここです、木です。

マルチン (見あげる) 木だと? どこだ、見えやしねえ。おりてこい。

声 あたし、木の中にいるんです、出られないんです。

マルチン 木の中だと、ばからしい。

声 まあきいてください。マルチンさん、あたしは仙女です。ふしあわせな仙女です。

マルチン 仙女だと、うそをつけ。

声 いいえ、ほんとです。あたしはジムベリンビンバです。あたしはもう百年から、この木の中にとじこめられてるんです。

マルチン (笑って) そうして、お月さまは青いチーズでできているのですか。

声 からかうのはよしてください。ほんとうにそうなんです。どうか、あたしを出してください。木はがらんです。穴を一つあけてくれればいいんです。

マルチン なんだかわかったもんじゃねえ。二つのつのある鬼で、飛び出すと、いきなりあんぐりやるんじやねえか。

声 そんなら、この小さい穴から、あたし手を出しますから、どうぞごらんください。この枝の落ちたところ
です。

マルチン (小さい手を見に、そのそばへ行く) ふうむ、
鬼の手には爪があるというが、これは桃色をしたかわ
いい手だ。なるほど、これは仙女かもしれないねえ。よ
し、じゃあ、出てこい。(手につばをして、木を切る)
声 マルチンさん、そっと切ってくださいよ。あたしが
けがをしますから。そうもうひと打ちです。

マルチン えい、えい。(最後の一げきを加える。木の
皮が落ちて仙女が姿をあらわす。マルチンひざまず
く) お、お姫さま——いろいろ失礼を申しました。ど
うぞごかんべんくださいませ。命ばかりはお助けを。

仙女 いいえ、あたしはあなたにお礼をしなければなり
ません。まあ、うれしいこと。百年目で、やっと明か
るいところへ出られた。マルチンさん、あたしの顔は
どう。昔はずいぶんきれいだったのだけれど。

マルチン どうも、じつに、おうつくしい。それに、ど
うも、お若いことといったら、とてもそんなにお年を

召した方とは見えません。

仙女 まあ、うれしい。マルチンさん、あたしまだむす
めだったじぶんね、年をとった一寸法師のまほうつ
かいがあたしをお嫁にしたいといったの。それはおそ
ろしい顔をしたやつなの。それで、わたしがことわつ
たら、大そうおこってあたしをこの木の中へ百年の間
ふうじこめてしまったの。きょうがちようど百年目な
のよ。それで、あなたに出してもらったの。あたしな
んとお礼をいったらいいかわからないわ。何かほしい
ものはなくて？ いってごらんさい。

マルチン ほしいものにもなんにも、まだ頭の中がくる
くるまわっていて、なにがなんだかわけがわからねえ
んです。

仙女 じゃ、あたしが考えてあげよう、なにかりっぱな
ものを。そうだ、三つの願いがいい。このゆびわよ。
だれでもこのゆびわをはめている者には、三つの願い
ごとがかなうのよ。

マルチン (ゆびわをもらって) どうもありがとう。お
じようさま——おくさま。どうもありがとう。

仙女　でも、願いごとは三つだけよ。だから、よく考えて願わないとだめよ。つまらないことをたのんでむだにしてしまっちゃいけなくなつてよ。一生役に立つようなことを願いなさいよ。（だんだんとおくへ行く）一生役に立つようなことを——一生役に立つようなことを。（消えるように行つてしまふ）

マルチン　（仙女の姿をぼんやり見送っていたが、やがて不意に自分の頭を打つ）目をさませ、マルチン、いや、いや、おれは目をさましているんだ。そこにかしわの木がある。そこにおれのおがある——それから、ここにゆびわがある。みんなほんとだ。まあ、なんといいがあるがたいゆびわだ。なんといううつくしい仙女だ。おれはたいした人間になつたぞ。だが、よく考えて願いごとをしなくちゃならない。うっかりつまらないことを願つたらたいへんだ。まず女房のマルガレットに相談して、それから学校の先生に相談をしなけりやならない。それから弁護士さんにも相談をしなけりやならない。おれはなんというしあわせな男だらう。（歌う）

ヒップーエエ、ピップーオオ、
ピップハレエ、ヒップハラア。

（踊りながら——去る）

第二幕　マルチンの家の内部

マルガレットがいねむりをしている。鳥がなきはじめる。犬が目をさましてほえる。

マルガレット　（目をさまして）これ、フリッツや、フリッツ。静かにしておいで。（口笛を吹く）ほえちやいけないよ。いい子だから。（フリッツ、首をふる）あたしのいうことをきくね。（フリッツ、おきあがる）おう、おう。（フリッツ、後足で立つ）おいで、フリッツ。（フリッツ、ほえながら走り回る。やがて、マルガレットと向い合つて坐る）お前、おながすいたんだらう。（フリッツ、うなづく）かわいそうに、もう肉は一きれもないよ。（フリッツ首をたれる）主人

が貧乏だと、犬までが貧乏するんだね。朝もお昼も晩もお辛さ。お芋のほかなんにもでやしない。あたしはもう、肉というものは、どんな匂いにするものだから、忘れてしまったよ。フリッツや、ここへおいで。（フリッツの頭をなでてやる。音楽がきこえてくる。犬がほえだす）

マルガレット （耳をかたむける）何だろう。（鳥がなき出す。犬がほえる）静かにおし。おだまり。なにかきこえるから。マルチンがこんなに早くかえってくるはずがない。だけど、マルチンのようだね。ああ、やっぱりマルチンだ。

マルチン （やはり「ヒップーオオーハレエ」を歌いながら、窓のところへ現われる）よう——どうした。

は、は、豚のあぶらみに牛のあばら三枚だ。肉屋はどこにいる——肉屋をよべ。ほーほーはーはー。

マルガレット まあ、どうしたんだろう。こんなに早くかえってきて。（犬が入口のところで飛びながらほえる）

マルチン （ころがりこむ。やがて起きあがりながら）

しあわせというものは、ころげこむものだと見えるな。これがなによりのしょうこだ。（犬がほえる、マルチン、椅子の上ののる）これ、これ、マルガレット、ごあいさつ申し上げる。おれは公しやくさまぐらいえらい人間になったんだぞ。いや、もうじきになるんだぞ。（犬、またほえる）もう貧乏人じゃないのだぞ。（犬、ほえる）もう芋はたべないですむのだぞ。

（犬、ほえる）芋なんかとなりの豚にやつてしまえ。おれは、うれしいのでよっぱらってしまったんだ。（犬ほえる）静かにしろ——フリッツ。（マルチン、椅子を飛びおりて、犬をける）静かにしねえか——。

マルガレット （泣きながら）まあ、家がこんなにこまっているのに、よっぱらうなんて。

マルチン 大きな声をするな。まあ、これを見ろ、これを。（ゆびわを出してみせる）

マルガレット おや——まあ、ゆびわだね。これは金むくかい。

マルチン 金むくどころじゃねえんだ。（体をかがめて小さい声でいう）きれいなお姫さまが、おれにそれを

くれたんだ。

マルガレット うそをおつきよ、お姫さまがなんでお前さんになんかゆびわをくださるものか。そんな、よぼよぼ山羊みたいなお前さんに。（坐る）

マルチン だまれ。仙女さまが、それをおれにくだすったんだ。

マルガレット （おこつて）仙女さまだつて。へ、どんな仙女さまだか。

マルチン よし、そんならくわしく話してやる。（マルガレットの椅子のうしろまで歩みよる）おれがその仙女さまを木から出してやったのだ。

マルガレット なんだつて。

マルチン いいからもう一度それを見ろよ。（マルガレット見る）大したゆびわだ。なんでも願いごとのかなうというゆびわだ。

マルガレット うそいいよ。

マルチン でも仙女さまがそういったんだ。

マルガレットほんとに、おまえさん、そうだと思うかい。じゃあ、やってみようじゃないか。なにかたのん

でみよう。

マルチン （さえぎつて）だまれ。——願いごとをいうものが、そううっかりできるものじゃねえ。まあ、見ろ、このゆびわになにか書いてあるから。

マルガレット よんでごらんよ。

マルチン （よむ）

「このゆびわをはめる者には、小にもせよ、大にもせよ、三つの願いかなうべし。願いごとは心してえらぶべし。つまらぬことを願いて、あとで後悔するなかれ」

マルガレット じゃあ、なにを願ったらいだろう。

マルチン だからよ。学校の先生さまと、お医者さまと、弁護士さまのところへ相談にいつて、一ばん大きな願いごとを三つきめてくるつもりだ。

マルガレット 行つといでよ。——すぐ行つといでよ。

マルチン （出かけながら）じゃあ、行ってくるぞ。

マルガレット ちよいと、お待ちよ、マルチン。だれかにゆびわをぬすまれると大へんだ。（マルチンふりむく）それはここへおいておいで——あたしにあずけて

おいで。

マルチン 女というものはうるさいものだ。なにもそんな――。

マルガレット (さえぎって) いいから、そのゆびわをあずけておいでつたら。

マルチン (マルガレットのそばへ行つて、ゆびわを渡す) いいか――たいせつにしくちやいけねえよ――大事なものだぞ――いいか――(戸口をたたく音がする) だれだろう。今ごろ。

マルガレット きっと、おとなりのカスパルさんだよ。

ビールを一ぱい、ごちそうするつて約束をしたから。

マルチン なんだ。カスパルか。あいつは村一ばんのおしゃべりだ。ゆびわのことを一言でもいっちゃあならねえぞ。いいか。お入り、カスパル。

カスパル マルガレットさん、お早よう。マルチンさんお早よう。(前へすすむ) たばこやすみか。大そう早いかえりだな。

マルチン うむ、もう、おれはきこりがいやになったんだ。それでおのをすてて、かえつてきたんだ。ところ

で、おれは用事があるから、ちよいと外へ行つてくる。

カスパル 用事だと。なんの用事だ。

マルチン 大へんな用事だ。お前のような人間には、話したつてわからねえことだ。

カスパル でも、一人で考えるより、二人で考える方がよからう。

マルチン だから、おれは公しやくさまのところへ相談に行くんだ。(腰をかめる) では、さようなら。

(出て行く。カスパル、テーブルに腰をかける。マルガレットそばへ行つて椅子に腰をかける)

カスパル 公しやくさまのところへ相談に行くだと――

あいつ、気でもちがつたんじやないかしら。

マルガレット さあ、ちがつたかもしれない――ちがわないのかもしれないさ。ふしぎなことが今日あったんだよ。

カスパル へえ。どんなことがあったんだ。

マルガレット それはいえない。どうしてもいえない。

カスパル おいいよ。だれにも話しやしないから。

マルガレット　ほんとに、だれにも、いわないね。

カスバル　ああ。ほんとに、だれにも、いわない。

マルガレット　そりゃあ、うれしいことなんだよ。いわずにやあいられないことなのさ。

カスバル　じゃあ、早くいえないじゃないか。

マルガレット　（ゆびわを出して見せる）このゆびわを
ごらんよ。これは仙女さまがくだすったゆびわだよ。

——願いごとが三つかなうというゆびわさ。

カスバル　ほう。そいつはうまくやった。お祝いに一ぱいやりたいな。（あたりを見まわして、舌なめずりをする）ぜひ一ぱいやりたいな。（また舌なめずりをする）おれはお前さんの昔からの友人だ。おれはお前さんのしあわせになったのを祝わないではいられない。

マルガレット　あたしは、村一番のりっぱな貴婦人になるのだよ。

カスバル　そうして、おれはその仲のいい友達になるんだ。

マルガレット　馬車を買うんだよ。

カスバル　そうして、おれは、それにのせてもらうんだ。

マルガレット　馬もたくさん持つんだよ。

カスバル　そうして、おれは、そのあとについて歩くんだ。

マルガレット　りっぱな宴会をひらくんだよ。

カスバル　おれは、そこへよばれて行くんだ。

マルガレット　（立ちあがる）おお、うれしい。（ほかの椅子の方へ踊りながら行く）まあ、なにを願ったらいいだろう。

カスバル　（テーブルから立って、戸棚へ行き、耳つきのコップをさがす。皿をひっくりかえす）

マルガレット　なにをさがしているんだよ。（カスバル皿をひっくりかえす）ぎょうぎの悪い。

カスバル　（マルガレットの方へふりむく）コップはどこにあるのだ。

マルガレット　わからないのかい——中二階の戸棚で、お前さんを待っているよ。

カスバル　ああ、中二階か。（はな歌を歌いながら、はしご段を上って、戸棚の中をのぞきこむ）どこだな。

マルガレット　おくの方だよ。

カスパル (手をつっこむ) や、あったぞ。(耳つきの

コップをつかみ出す) ほう、ビールがみなみとついであるな。(はな歌を歌いながら、はしご段をおりてくる。そして椅子に腰をかける) や、ばんざい ばんざい。これから一日に三度食事のできますように。

(のむ)

マルガレット ちびちびおのみよ。もったいないから。

カスパル (ひとのみのんで、せきをして、ぜいぜいいながら) な、な、なあるほど。

マルガレット そう早くのんじゃあだめだよ。

カスパル (しゃっくりをする) だが、どうもうれしいものだからな。うれ——(しゃっくり)——しい——

(しゃっくり)——もんだからな。(笑う)

マルガレット あんまり早くのむから、あんまり早くきげんがよくなってしまうんだよ。

カスパル だって、めでてえじゃないか。え。めでたければ、祝うのはあたりまえだ。さ、マルゴオ、踊るべえ。(カスパル、ひとりで踊り出す。見ているうちにマルガレットも踊りたくなり、一しよに踊り出す。や

がてマルガレットはつかれて椅子に腰をおろす)

カスパル (つかれてテーブルの上によこになる。あくびをする。手足をのばす。それから、おきあがる) と

ころで、おれは今なにがほしいのか知っているか。

マルガレット もう一ぱいビールがのみたいんだろう。

カスパル 大ちがい——おれは腸詰がほしいんだ。

マルガレット そういえば、もうだいぶ長い間、腸詰をたべないねえ。

カスパル (テーブルをはなれて、そこらをさがし歩く)

腸詰はねえかなあ。腸詰や腸詰。とび色の腸詰。

マルガレット ほんとに腸詰が少しほしいねえ。ああ、ほしい、ほしい。腸詰がほしい。

とたんに、雷光一せん、雷鳴にわかనికిこえてくる。

マルガレットとパスカルはびっくりして、床の上に伏す。腸詰がテーブルの上に現われる。

カスパル (びくびくしながら頭をあげる) 生きているか。